慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	仏蘭西経済学に於る価値論の発達（一）
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.7 (1924. 7) ,p.1015(105)- 1037(127)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240701-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

for just keeping up their numbers without increase.)

而も其の國の生產的資源を支持するために要求せらるゝものは、大體に於て其の國民をばより貧困ならしめることに依て初めて其の豫定の目的より他の目的に轉せしめ得るのである。乍併之以上に生產せられし總てのものは、勞働者及び資本家の掌中に在ると將又他の如何なる種類の賃子所有者の掌中に在ることを問はず、社會の生產的資源に對して何等の損害を與へずに直接の享樂のために供せらるゝであらう。而して斯る目的に供せられざる總ての部分こそ、國民的資本若くは享樂の永續的源泉（the national capital or the permanent sources of enjoyment）に對して明かに附加せらるゝものである。（J. S. Mill, Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, 1874, 2nd edition, pp. 73-89）

以上はジョン・スチュアート・ミルが其の著「經濟學上未定の諸問題」第三論即ち「生產的及び不生產的なる語に就て中に論述したる見解の大要である。茲に於て右の見解は、彼が其の後幾何もなく一八四八年に公刊せる「經濟學原理」（Principles of Political Economy, with some of their applications of social philosophy, 1848）中の所說と相違する所ありや如何と云ふ問題が生ずるのである。依て次に私は其の「經濟學原理」中の所說を窺ひ、併せて前著との比較を試みることゝする。

佛蘭西經濟學に於る價値論の發達（一）

津田誠一

一

彼は轉々延長して歇まざる鎖の如く此は其圓周を擴大し行く輪に似たり。"La Valeur d'après les Économistes Anglais et Français depuis Adam Smith et les Physiocrates jusqu'à nos Jours" の著者 Turgeon は、這般の比喩に託して英佛兩國の學界に現前せる價値論發達の經緯に關し、顯然たる對照の存する事實を指摘した（p. 365）。蓋し英吉利に於ては正統學派の客觀的價値論が Stanley Jevons 並に墺太利學派の主觀的價値論に其所を讓り、更に Alfred Marshall 一派が主觀客觀兩學說の融合調和を企劃する最近の傾向を醞釀するに至るまで前後一世紀を踰ゆる長日月に亘り、陸續接踵斯界に著聞せる幾多の巨擘は價値の眞因本態の那邊に存するやを模索して、或は勞働より生產費へ或は獲得の難易より最終效用へと逐次舊套を蟬脫して新衣に代へ、徐々に乍併着實に、綿々縷々盡くるを知らざる進化の狀況を展開し來れるに、翻て佛蘭西に於る價値論推移の跡を訊ねれば、後人は固より前人の所說を加減添削孜々內容の充實完備を遮幾せざりしにあらずと雖、尙且つ其根本の立脚地に至りては依然經濟科學樹立當初の傳統的見解を悠々墨守し敢て舊態を遺棄せんと欲する者稀であつた。然らば即ち此國の學徒は曠日彌久徒に同一地點を漫步したるの故を以て、當に緩怠の謗り迂遠の責を免れ得ざるものなる乎。あらず。寧ろ吾人の觀察を以てすれば彼等の先進は

其發端より能く事物の眞髓を把握し、價値の根源を外的原因に求めずして却て之を人間の心意の裡に內省し、以て後進に對し確乎不動の思辨の基礎を示唆し得たると同時に、後進亦た能く彼等の衣鉢を奉戴して誤たず。眞理の目標に向つて漸次行進したりと云ふよりは、旣に確保したる眞理の萠芽を相傳し繼承し培養し助長し以て現代に至れるものである。是れ英國に於る價値論發達の動的進步的なるに對峙して佛國に於ては其靜的保守的なる所以、吾人は斷じて其外觀に眩惑して妄に優劣を云爲するの輕舉を許容する能はざるものである。

其鄕國の先覺が比々皆物質本位の觀念に浸潤し、爲に人間の心意其物を閑却し來れる短見を痛歎したる Jevons は謂へらく、「幾多の佛國經濟學者は夙に斯學窮極の目的の人類の欲望に存する所以を觀破せり」と（Theory of Political Economy, P. 40）。而して彼れは其例證として Bastiat 並に Coucelle-Seneuil を枚擧すと雖、然も斯の如き心理的傾向主觀的色彩は、苟くも佛蘭西經濟學史を涉獵する者の初一步に於て直に逢會する所である。洵に其發端よりして此國の學徒に取つては、欲望の生める效用こそ價値の論理的前提にして又其窮極の根源であつた。彼等が慣用若しくは想像せる「稀少性效用」utilité rare、「有償的效用」utilité onéreuse、「交換性效用」utilité échangeable、「最終效用」utilité finale 等の名辭は、總て價値の本質上效用は主たる觀念にして、勞働、稀少性、交換性等は單に其補足觀念に過ぎざる事を意味せるものである。

此見地に立脚して佛蘭西に於る價値論の發達を大觀するに、之を區分して凡そ三期に劃する事が出來る。第一期は即ち十八世紀の後半に該當する發端創始の時代である。此時に於ては Physiocrates 並に其圈外に立てる許多の巨星各々堂々の論陣を張りて學界稀觀の壯觀を呈せるに拘らず、價値論の探究は久しく暗中模索の境域に彷徨したるが、爾て一道の光明は Turgot 及び Condillac より來り主觀的價値論の萠芽漸く爰に胚胎するを見る。

第二期は之を建設時代と云ふを得可く略ぼ十九世紀の全般を掩ふものである。乃ち此世紀の前半を代表する者に J. B. Say あり Rossi あり。明暗粗密必ずしも其度を一にせざるも、共に前代に繼承せる主觀的萠芽の培養に努めた。次で同世紀の中葉に及ぶや一葦帶水の英佛兩國間に思潮の徂徠愈々頻繁を加へ、價値論上に於ても英國流の影響漸く顯著なるものあり。從來價値の討究に當つて常に買手の側に立ち消費者の心と眼を以て觀察し來れる佛國の學徒は、爰に至つて賣手の側に立場を代へ生產者の心と眼を以て考察するに同意した。Baudrillart, Passy, Garnier 等の著作を繙く者は、需要を支配する效用と供給を支配する生產費とを結合せんと欲するの努力を歷然看取するであらう。恰も時を同じうして同樣の折衷主義が英吉利の學界にも瀰漫するあり、就中 J. S. Mill に於て特に明確に顯現せるは決して偶然ではないのである。然も吾人の記憶を要するは斯の如く外來の見解を攝取しつゝも、尙且つ佛蘭西の學說は其根柢に於て發端當初の主觀的解釋を決して拋棄する事無く、欲望 besoin 及び願望 désir より生起せる「稀少性效用」utilité rare なる觀念の下に依然之を支持するに忠實なりし一事である。次で一八七〇年に及び英國の影響遽に途絕し、方法論上に於ては獨逸歷史派經濟學の思潮が徐々に流入し來れる一方、價値論上に關しては墺太利學派の所說漸次浸潤し來りて遂に最終效用 utilité

finale なる觀念は現前するに至るのである。

最後に第三期は即ち現世紀最後の傾向を總括する完成普及の時代である。此時に及んで佛蘭西の學界は翰林院派と大學派との二派に分岐し、古典自由の思想を遵奉するに忠なる前派には Courcelle-Seneuil, Maurice Bloch, de Molinari, Levasseur, Paul Leroy-Beaulieu, Rambaud, Colson あり。批判的精神の横溢せる後派には Jourdan, Villey, Cauwès, Beauregard, Gide, Perreau, Truchy あり。然も價値論の關する限りに於ては固より色調に多少の差こそあれ、概して一樣に心理的立脚地を保守せるものと云ふ事が出來る。斯くて遠く創始の時代に早くも胚胎せる主觀的價値論の萠芽は、英墺二國の相反撥せる影響を交々經由して更に其發育を助長し、遂に現世紀に入りて開花結實の盛期に遭遇せるものと云ふ可きである。(Charles Turgeon et Charles-Henri Turgeon: La Valeur d'apres les Économistes Anglais et Français, pp. 366-368)。吾人は以降前掲三時代を通ずる發達の概況を順次檢討するであらう。

II.

發端創造の時代は客觀主觀兩學說の葛藤に始まる。大體前者を代表する者は其直接の影響を英人 Cantillon に享受せる Quesnay 並に之を繞る Physiocrates の諸星にして、後者を代表する者は伊太利人 Galiani に示唆を承け Physiocrates の圈外に立ちたる Turgot 及び Condillac である。

Richard Cantillon (1680-1734) は其一七三〇年乃至三四年の交に脫稿し、後、異邦の知友に示す可く自ら佛譯、死後一七五五年に上梓せられたる "Essai sur la Natur du Commerce en Général" の開卷劈頭、「土地は吾人が富を抽出する源泉又は素材にして人間の勞働は之を生產する形式なり」と喝破したるが、同書第一編第十章以降に展開せられたる其價値價格論も亦た此基本思想より流露せるものである。以爲らく物の生產に投下せらるゝ「土地生產物の分量並に勞働の分量兼性質が必然價格を構成する」(Essai sur le Commerce, reprinted for Harvard University, Boston, 1892, p. 34)。例へば一封度の麻を以て精巧なる Bruxell 產のレースを製するには四人の一年間の勞働或は一人の四年間の勞働を必要とし、而して此レースに對して支拂はるゝ價格は一人の四年間の生活資料、並に是れに加ふるに其生產に參與せる總ての企業家及び商人の利潤を支辨するに相當する事は、調査の明示する所である。次に英國產時計の鋼鐵製發條は通常、素材と製品換言すれば鋼鐵と發條との比率を一對一ならしむるが如き價格に賣却せられる。其結果此の際は投下勞働量のみが其發條の殆ど全價値を構成する。然るに他方に於て牧場より市場に搬出せらるゝ乾草若しくは諸子の伐採せんと欲する木材の價格は土地の豐度に從ふ其生產物の素質如何に依つて左右せられる。最後に Seine 河より掬する一杯の水の價格は、其供給莫大にして曾て涸渴する事無きが故に、零である。乍併巴里の巷衢に於て水の無償にあらざるは運搬の勞働が價格を構成する爲である。「如上の歸納と例證に依つて、畢竟一物の內在價値又は內在價格は、土地の豐度又は生產物量並に勞働の性質を斟酌したる上にて、其生產に入る土地及び勞働の分量の尺度たる事を釋明し得たりと信ず」と(pp. 34-36)。

然らば這個の內在價値は必ず市場に於る現實の價格と成つて發現するものなる乎。あらず。Cantillon に從へば一物の市場價格を其內在價値の或は上或は下に乖離せしむる原因は人々の叢氣嗜好及び彼等の消費量である。例へば貴顯あ

り。其庭園に泉水を鑿し築山を設くる時は其内在價値は土地と勞働とに比例す可きも、其價格は事實必ずしも此比例に追隨せざる可し。即ち一朝之を賣却せんと欲する時は、或は誰人も彼れに其投下したる所の半額をすら與ふるを肯んせざる事もある可く、或は欲求者數有る節は其内在價値の倍額を收受する事もあらん。又若し一國の農民が尋常以上の、換言すれば該年度の消費に必要なる以上の小麥を播種するに於ては、小麥の内在價値眞正價値 Valeur intrinsèque & réelle は其生産に入る土地並に勞働に相應す可きも、然も小麥は過剰に陷り賣手は買手よりも多數に上る可きが故に、市場に於る小麥の價格は必然其内在價格又は内在價値以下に低落す可く、反對に農民が必要消費量以下の小麥を播種するに於ては賣手以上の買手を生ず可きが故に、其市場價格は其内在價値の上に昇騰するであらう。物の内在價値には苟くも變動ある事無し。唯だ一國に於る商品食料品の生産を其消費に適合せしむるの不可能なる事が、市場價格の日常の變動不斷の干滿 flux & reflux の原因となるのである。遮莫善良に管理せらるゝ社會に於ては、消費の充分に不變齊一なる食料品並に商品の市場價格は其内在價値より著しく乖離する事無し」と云ふのである（pp. 36-39）。約言すれば内在價値と市場價格との適合は固より常に必ず可からずと雖、然も前者は絶えず後者を支配牽引して正當なる狀態の下に於ては兩者一致の傾向ありと云ふに歸す。

Cantillon は是れより進んで同書第一編第十一章を「土地の價値と勞働の價値との關係」と題し、土地と勞働との間に等式を立てゝ幾許の土地は幾許の勞働に其價値同じきかを究明せんと欲し、種々なる考證より歸納して先づ最下級勞働者の勞働の價値は該勞働者並に其家族の生活資料の價値に匹敵す可き所以を述べたる後曰く、斯くて「吾人は日傭勞働者の勞働の價値は土地生産物と一定の關係を有する事、及び一貨物の内在價値は其生産に使用せらるゝ土地量と其生産に入る勞働量、後者を更に換言すれば其生産物が其處に勞働したる人々に歸屬する所の土地量とに依りて、測定し得る事を認むるものである」と（p. 53）。而して文化其度を異にし農工其撰を異にするに從ひ各勞働の價値には固より差等を免れずと雖、然も特定の國土特定の時期に關して考察する時は種々なる高級勞働の價値も畢竟最下級勞働者の生活資料を基準として律し得可きものと考へた。

結局 Cantillon の所説を要約すれば、先づ一物の内在價値は土地の豐度並に勞働の性質を考慮に加へし上にて、其生産に入る土地生産物の分量と勞働の分量とに依りて決定せらると斷じ、次に最下級勞働の價値は勞働當事者と其家族の生活資料に要する土地生産物の價値に等しきものと看做し、更に土地生産物の價値と土地自體の價値とを同一視すると云ふ思索の順序を辿りて遂に凡ゆる物の内在價値の構成要素を土地一つに還元し了れるものである。其純然たる客觀的生産費説に終始せゝは喋々を俟たぬ。而して Cantillon の同著は英原本は嘗て世に出づる事無く自ら筆を執れる佛譯本のみ既述の如く一七五五年に剞劂に附せられたるものなるが、然も佛譯の寫本は上梓以前夙に久しく同國に流布して Physiocrates の經濟思想に影響を及ぼす事極めて深く、同派の鼻祖 Quesnay も其一七五七年 Diderot の Grande Encyclopédie に寄せたる "Les Grains" 中の一節に於て明に Cantillon の啓示を認めてゐる（Oeuvres de Quesnay, par Auguste

Oncken, Francfort, 1888, p. 218)。其價値論に於て兩者共通の色彩に濃厚なる亦た當然の歸趨であらう。

三

François Quesnay (1694-1774) は價値論の爲に獨立の一項を設けて特別の演述を試る事無かりしが故に、其見解を窺はんと欲すれば其雜多の著作の雜多の主題に關する論說中に、乍併可成り明白に、含蓄せらるゝ所を綜合して推斷するの外はない。Quesnay の價値論にして Cantillon のそれに歩を進め得たるものありとせば、固より夙に John Locke も之を行くる所なれども、後世の所謂使用價値と交換價値に相當する區別である。即ち彼れは其所有者の直接の欲望滿足に供せらるゝ物の價値を「日用價値」Valeur usuelle、交換を介して間接に欲望滿足に供せらるゝ場合の物の價値を「賣買價値」valeur vénale と名付けた (Oeuvres, pp. 288-290)。而して彼れは前者を輕視し後者を重要視し經濟學上に於る研究對象たる可き富は唯だ「賣買價値」を具有する際に於てのみ成立す可しと思料した。曰く Louisiana の蠻人は水・材木・獵獸・果實等定量の財を享樂したりと雖、然も是等諸物は毫も「賣買價値」を備ふる事無かりしが故に富ではなかつた。然るに一旦彼等の間に商業の發生を見るに至りて以來是等諸財は「賣買價値」を獲得し從つて富と化したるものである」と (Notes sur les maximes, Oeuvres, p 353)。彼れが別の機會に於て後世の所謂自由財と經濟財の區別に相當す可き「無償財」bien gratuit と「商業財」bien commerçable との區別を設け、「無償財とは其存在量過剩にして人類が到る處に之を享樂し得可き諸物を云ふ」。例へば吾人の呼吸する空氣吾人を照明する日光の如し。「商業財とは人類が勞働及び交換に依つて獲得し得る諸物にして、吾人が富と呼ぶは此種の財なり。蓋しそは彼此相對的に相互に relative et réciproque les uns aux autres「賣買價値」を具有するを以てなり」(Questions sur la population, l'agriculture et le Commerce, Oeuvres, pp. 288-290) と云くるは前揭の章句と照應して彼れの眞意を忖度するに足る。

斯くて其考察を專ら所謂「賣買價値」にのみ限局したる Quesnay は、價値決定の原因を探求するに當りて Cantillon の如くに內在價値と市場價格との對立を設けず、却て「所謂價値とは價格なり」(Impôt, Oeuvres, p. 58) と斷じて其價値論は事實價格論に終始した。而して彼れは此賣買價値則價格の決定原因を交換生產兩方面より觀察する。先づ交換の見地より律する時は彼れの所論は需要供給說の上に多くを出でぬ。曰く「價格は買手の利益にも果た又賣手の利益にも服從するものにあらず。是等雙方の利益は自體賣買關係に於て相互に反對の地位に立てるものである。故に賣手と買手は之を個々別々に考察する時は決して生產物の價格の裁決者なりと云ふを得ず」。「何人も生產物に關しては其時價 prix courant の一般的原因が、其稀少又は饒多の程度換言すれば賣手若しくは買手の間に於る或は激しく或は緩き競爭に存する事を知らざるはなし。隨つて生產物の實際の價格は其賣買に先立つて既に最初より存在せるものである」と (Oeuvres, p. 388)。注意を要するは此終末の一句である。是れに依つて Quesnay の意味する所は、成る程價値價格は交換に依つて確認せらるゝに相違無きも、然もそは新生產物が市場に搬出せらるゝ以前既存の一般的原因、換言すれば一國の消費と生產との相互關係に依つて決定せらると云ふのであるが、然も同時に彼れは他方

に於て生産の方面より價値を考察し、其決定原因を勞働者の生活資料に依つて秤量せらるゝ勞働の費用に歸するに及び、吾人をして其著しく Cantillon 流の價値說に接近し行けるにはあらざるかを思はしむるものがある。

即ち謂ふ「諸子にして若し工業に從事する勞働者の所得を以て土地耕作に雇傭せらるゝ勞働者の所得と比較せんか、諸子は其孰れの場合に於ても所得は勞働者の生活資料に依つて制限せらるゝ事、並に工業製品の價値は恰も勞働者及び商人が消費する生活資料其物の價値に正比する事を發見す可し。斯くして工匠は自己の生産する所と正に同額の生活資料を破壞す」（Grains, Oeuvres, p. 233）。同一の理由に基き商賈に從事する者の所得も亦た其必要生活資料を償却するに過ぎざるを以て、交換に於ては唯だ等價と等價の交換あるのみにして毫も富の增殖ある事なし（Oeuvres, p. 386）國民の年々更新する富の尺度は第一次的なる土地生産物の賣買に於る價値のみと（Analyse du tableau economique, Oeuvres, p. 307）。然も Quesnay は如上の言說にも拘らず各個の取引に於る商業の利得を明に認めたりと覺しく、「商人は國民の損失に於て自己の利益を可及的最大に仲張せんが爲に、可及的廉價に購入して可及的高價に賣却せん事を圖る。彼れの私的利害は國民の利害に背反す」。乍併「各個の場合に於る競爭は斯かる利得の法外に逸するを妨ぐ」（Analyse du Tableau Economique, par Daire, Physiocrates Vol. I. pp. 73-74）と云へるは如何。以之觀之 Quesnay の眞意は畢竟 Kaulla の解釋の如くに、「商工業に於る競爭の自然的自由は財の價格を其眞正なる且つ自然的なる價値に一致せしむるの傾向を有す」と思惟せるものなる乎（Rudolf Kaulla: Die Geschichtliche Entwicklung der Modernen Werttheorien, s. 124）、換言すれば彼れは固より明白に之を披瀝する事無かりしと雖尙且つ其胸奥の一隅に於て、Cantillon の所謂內在價値に類似し市場價格を窮極に於て牽引するものゝ存在を漠然認容せるにはあらざる乎。吾人は之を肯定せんと欲するものである。

四

爰に於てか問題は更に一轉して Quesnay の腦裡に潛在したりと推測せらるゝ正常の價値を決定する所の要因如何に遷らねばならぬ。之を生産費なりと斷ずる論者に Sewall あり、然らずと駁する者に Haney がある、而して Sewall は自家の結論を表明する以前に來て其論據を鞏固ならしむる爲に、暫らく Quesnay の正系嫡流たる Le Trosne の價値論に讀者の一瞥を求めてゐる。

Guillaume François Le Trosne (1728-1780) は其著 "De l'ordre Social, ouvrage suivi d'un traité élémentaire sur la valeur, l'argent, la circulation, l'industrie, le commerce interieur et exterieur," 1777, 二卷、就中第二卷別題 "De l'intérêt social, par rapport à la valeur, à la circulation, à l'industrie, et au commerce intérieur et exterieur" に於て價値に關する Quesnay の散在したる見解を整理し敷衍した。其大意を要約すれば、社會の成立と共に生産物は人間同志の接觸より生ずる新たなる屬性を獲得する。此屬性は則ち價値にして生産物を化して富と爲すものである。價値は一物と他物、一生産物の定量と他の生産物の定量との間に見出さるゝ交換の比率より成る（De l'intérêt social, Daire, Physiocrates, p. 889）。價値に第一次的價値と第二次的價値とあり。前者は土地生産物が其實際の耕作者の掌中に存す

る時に具有せる價値にして、後者は爾後の生産に依り是れに附加せる價値である。富の增殖は唯だ前者を以てのみ秤量せられ、兩者の差違は富の原型を變じ又は其の場所を移動する間に費消せられし生活資料を尺度とする所の、勞働に依つて決定せらる（p. 903）。價値の素因を求むるに次の如し。第一效用、但そは價値の條件なれども尺度にあらず。第二平均必要生産費。蓋し賣價が生産費を償却するに足らざる時は生産繼續の動機空しく再生産を期す可からざるが故である。第三貨物の多寡即ち供給狀態。第四消費能力に關聯する需要狀態是れである。就中最終の一條は價値決定の至高の要因である。蓋し一國の消費額は單に人民の員數のみならず同時に其享樂せる富裕の程度に依る。而して此は主として年々の生産額に依り決定せらるゝものなるが故に生産其物が價値の窮極の原因である。そは人民が其購買する所に對して幾許を支拂ひ得るかを決定するものであると云ふのである（p. 890, et seq）。

以上の言說を基礎とーてSewallの裁斷する所に從へば畢竟正系Physiocratesの價値論の要旨は、「最初に之を生産したる土地耕作者の掌中より逸出する際に於る原料の交換價値は其消費對生産の關係に依り決せられ、完成品の交換價値は是れに加ふるに加工期間中に於て勞働者が生計上消費せる價値を包含する。而して其孰れの場合に於ても消費は所詮生産費の反映に外ならざるを以て、生産費こそ價値の窮極の原因にして且つ其尺度なりと云ふに歸着するものゝ如し」と述べてゐる（H. R. Sewall: The Theory of Value before Adam Smith, p. 88-89）。

然るにHaneyは斯くの如き見解を斷乎として否定する。以爲らく「彼等Physiocratesの思想に依り示唆せらるゝ論理的解釋は次の如くである。即ち財の價値は其有用性（效用）に根柢を有す。工業製品は二種の部分より成る。一は本源的素材、他は其運輸加工に費消せられし精力である。前者の價値は一部分自然の賜にして需要供給の比率に依り決せられ、是れに後者の該製品を完成し並に之を市場にまで齎らせる人々の生産資料を追加せねばならぬ。Physiocratesの富に關する全哲理は效用の重要さを以て其精髓と認め、且つ其重要なる所以は明瞭に叙述せられてゐる。彼等の所謂純收益Produit net則ち餘剩が其價値を生産費に依つて決定せらるゝ筈無き事は明瞭である。蓋しそは自然の賜にして生産費其物を凌駕する餘剩なりしが故である。果たして然らばPhysiocratesが價値は生産費に依り決せらるると看做したりと云ふは不可能である。彼等は成る程價格は必要生産費を包容せざる可からずと認めた。併乍此は決して所謂生産費價値說にあらず。彼等は價値の一要素として年産額を高調した。然も此は其購買力を制限し從つて財に對する需要を制限するが爲であつた」と（Haney: History of Economic Thought, pp. 173-174）。

今如上の相背馳する兩見解を比較檢討するにSewallの所論はHaneyのそれに一籌を輸するものと斷ずるを憚らぬ。蓋しCharles Gideの所謂Physiocratesの全思想體系中最も誤れる、同時に最も獨特なる學說として衆人周知する所の純收益の觀念は、其定義に於て生産費自體を凌駕する餘剩に外ならざるが故に、且つ亦た彼等は合理的なる狀態の下に於ては土地生産物には必ず這個純收益の發生す可きを期待したるものなるが故に、彼等の看做して正常なりと思惟する價値が到底生産費に合致す可き道理絶無なる

を以てゞある。Gide は更に此點に言及して曰く、「Physiocrates は慥に『善正なる價格』bon prix 換言すれば生産費を凌駕する餘剰を齎らす所の價格は其所謂『自然的秩序』の正則の結果であると思料した。苟くも價格が生産費の水準にまで低下するに於てはそは『秩序』の破壞せられたる確證であつた」と（Gide & Rist: History of Economic Doctrines, p. 15）。

然らば抑々 Physiocrates は其所謂『自然的秩序』の下に發生する正常合理の價値の決定因を那邊に求めしものと推す可きや。固より加工運輸に依る中間的增加價値は勞働者の生活資料に依りて決定せらるゝと思惟せる事其言説に徵して明瞭なりと雖、本原的第一次的なる富の原型に關しては如何。此難問に對しては彼等の攻究は所詮不徹底と云ふの外はない。彼等は唯だ需要供給に藉口して其需要供給の背後に働くものゝ何たるかを深く追求するの意圖を缺除した。彼等は一製品の交換價値が一部分生産費に依り牽引せらる可きを確認し乍ら他の部分を支配する根源如何を看過した。是れ蓋し既述の如く彼等が發端より其考察を所謂「賣買價値」valeur vénale 則市場價格に限局して能事了れりと爲せる當然の歸結であらう。

但吾人は他方に於て正系 Physiocrates の關與する限りに於ては、其價値論の精髓が效用に在りと爲す Haney の見解にも亦た讃同する能はざるものである。洵に彼等は苟くも物に交換價値の發生せんが爲には必ず豫め效用の存在せざる可からざる所以を認容せりと雖、然も亦た單に效用は價値の前提條件なりと云ふに止らば孰れの頑愚なる生産費論者か之を認めざるものあらん。要は效用が價値の大小の決定因たりや否やに在る。而して Quesnay は所謂「日用價値」valeur usuelle を認むと雖之を輕視して研究の圈外に退け、Trosne は效用が價値の條件たるを認むと雖同時に其價値の尺度にあらざる旨を敢て表明した。彼等は富を以て有形具體の物質に限り、生産階級を以て農業關係者のみに限り、商工の勞務と雖尙新效用の創造に依りて富を生産し得るの事實に盲目であつた。所詮彼等の思索の過程は徹頭徹尾客觀的であつたのである。

乍併更に翻つて省察するに Haney に如上の言辭ある、亦た決して故なしとせぬ。蓋し彼れは Physiocrates の正統たる Quesnay, Trosne の學説と其圈外に立てる Turgot の學説とを漫然混淆し共に廣義に於る Physiocrates の列伍に入れて包括的に批判を下せる爲である。吾人は斯かる態度に組しない。蓋し爾餘の主題は姑らく措き、尠く共價値論の關する領域に於ては其思索の經緯に顯著なる對照を示せる彼れと此れとを、無碍に同一準繩を以て律し去らんと欲するは到底粗放失當の謗りを免れ得ざるが故である。是れ吾人が前揭正統 Physiocrates の客觀的價値論に對峙して、別に節を改めて同學派の圈外に屬する Turgot, Condillac の主觀的價値論を考察せんとする所以である。而して彼等に直接の影響を與へし者は伊太利人 Galiani なれども更に其淵源を探索せんと欲すれば、遠く同國同系統の價値論を Davanzati にまで遡らねばならぬ。

五

Firenze の詩藻豐潤なる商 Bernardo Davanzati (1529-1606) は一五八八年學士會院 Accademia Fiorentina に於て "Lezione delle Monete" なる題下に貨幣惡鑄を非議せる一條の講演を試み近世主觀價値論の胚子を示した。彼れは先づ財の價格則交換價値は毫も其構成素材の自然的性質

とは無關係なる所以を論じて謂ふ「天然の犢は黄金の犢よりも其質遙に高貴なるに拘らず其價格遙に低劣なるにあらずや。其價格黄金の半粒に過ぎざる一箇の鷄卵も能く饑渇の塔中に呻吟せる Ugolino 伯の命脈を十日間繋ぐに足れり。是れ現世一切の黄金をすぐつて是れに當つるとも尚且つ不可能の事にあらずや」(Lezione delle Monete, p. 31)。「小麥に優りて生活上重要の物ありや。然も萬粒の小麥は一粒の黄金と賣買せらるゝにあらずや。然らば天然の資質爾く高貴なる諸物が爾く少量の黄金に匹疇するに過ぎざるは如何。抑々什麽の原理に準じて定量の一物は定量の他物に價するものなりや」(p. 32)。解説に曰く、「人類は總て自己の幸福を目的に勞働する。幸福は缺乏の感欲望の念を滿足せしむる事に於て確保せらる。缺乏の感欲望の念を滿足せしむる自然界の萬物は總體に於て流通貨幣全額の價値に等し。蓋し人々は共同の承允に依り金銀銅の金屬貨幣と諸財とを相互に交換する事を諾せる故である。各部分は總體の性質を備ふ。故に或る財に代へらるる可き一定貨幣額が貨幣全額に對する比率は、其財に依り確保し得る個々の幸福量が人民の全幸福量に對して有する比率に等し。例へば水の吾人に供する滿足の程度が吾人の感ずる渇渇の程度に正比するが如くに、吾人の享受する幸福は吾人の具有する缺乏の感欲望の念を滿足し得る度合に準じて發生する。而して欲望は其尺度を自然、季節・氣候・場所並に不斷に變轉して歇まざる各財の卓越性及び稀少性又は存在量に求むるものである」と。如上の言辭が明に一財の價値は其個々の分量が確保し得る個々の幸福量、換言すれば其主觀的效用に基くものとの觀念を表白せるは何人も首肯する所であらう。是れに續いて列擧せる幾多の例證は、財の存在量と是れに對する欲求との關係を以て價値決定の根蔕と爲せる Davanzati の卓見を雄辯に物語るものである。乃ち謂ふ「Pindaro の所言の如くに水は人生に必要不可缺の物なるも、然も何人も無償を以て無限に之を獲得し得るが故に其價値零である。嫌惡す可き物は鼠である。然も Cassillino の攻圍の際には窮餘其一匹の價二百 fiorini を以て賣買せられた。而してそは決して高價ではなかつた。如何となれば之を賣りたる者は餓死し之を購へる者は存命せるが故である Essaù が其生來の貴重なる權利を棄て Esopo 物語の鷄が寶石を無用とせるが如き比々皆爰に起因する。驕奢の人は花瓶・寶玉・彫像・繪畫に法外の高價を支拂つて憚らず。是れ彼等が其支出する黄金量に於ると同一程度の滿足を這個諸物の美に於て發見するを以てゞある。同樣に Peru の土人は當初鏡・針・鈴等の類に對して金塊を交換した。蓋し當時に在りては如上の珍奇なる諸物が彼等の間に驚異を喚起し、存在量の豐富なりし黄金よりも一層多大の滿足を是れに見出せる爲である。斯くて該地方より金塊續々流入し物價は三分の一の昂騰を見た。此物價騰貴は正に國内に於る貴金屬の增加を示せるものである。而して該地方の金銀が總て歐洲に移入し盡さるゝ曉に於ては、そは畢竟希望者無き貨物と化し爲に吾人は他の稀少なる物件を以て貨幣とするか、然らずんば往昔の物々交換時代に復歸せざるを得ざる可し」と (pp. 34-35)。(此項、高橋誠一郎教授「經濟學史研究」自一九四頁至一九八頁參照)。

洵に Davanzati が遠く經濟學未生以前、群儒悉く價値の因由を客觀的事象に探求しつゝありたる時、獨り卓然別個の道途を辿りて眞理の殿堂に驀進せるは驚異に價する偉觀である。

Sewall は之を概評して謂へらく「Davanzati は蕪雜なる態樣乍らに效用は存在量と希求性との作用なるを表明した。彼れの學說に於て銘記す可き重要の意義を有するは、價値の根據たる效用が客觀的にあらずして主觀的たりし事であつた。彼れの念頭に顧慮せるは物象の自然的資質の側よりするにあらずして人間の性情の側よりする幸福發現の問題であつた。斯くして彼れと埃太利學派との間に存する地位の逕庭は一見感受せらるゝ程ではない。然も尙且つ兩者は比較す可くもあらず。そは恰も朦朧たる意見と科學的演述との差に似たり」と（Theory of Value before Adam Smith, pp. 54-55）。或は然らん、されば Davanzati と埃太利學派と吾人は其時代の懸隔に想到する時、其思索の懸隔の寧ろ甚だ僅少なるに讃歎を禁ずる能はざるものである。業績空しからず。是れより後一世紀彼れの衣鉢は Montanari に依つて繼承せられた。

Geminiano Montanari（1633-1687）は本來算數並に天文の術に長じたるが其經濟學史に記錄を留むる所以は一六八〇年代の執筆に懸る貨幣に關する二著あるに依る。"Breve trattato del valore delle monete in tutti gli stati," 1680, 及び "La zecca in consulta di stato, trattato mercantile," 1687 即ち是れである。其見解に從へば貨幣は萬物の量の尺度にして人間の欲求情感亦た是れに依り測定せらる、蓋し吾人が一物に對して支出する額は是れに對する渴望に應當するが故である。斯く貨幣が欲求の尺度たると同時に欲求は復た貨幣並に價値の尺度となる。かるが故に人間の欲求は貨幣の對應す可き貨物の價値を測定する。此理に從つて欲求若しくは欲望は貨物の價値を測定すると同樣に貨幣の價値を測定する。逆に又貨幣は貨物の價値を測定すると同樣に欲求及び欲望を測定する。換言すれば Montanari の意味する所は、欲求、貨幣、貨物の三者は相互に其一の狀態を決定すれば他の狀態をも決定す可き關係に立つと云ふのである。爰に於てか彼れは Davanzati の命題を擁護し、交換せらるゝ財の總數は貨幣の現實流通額に應じて變動ある可く、從つて財の分量に變化無きものとせば貨幣流通額の變化は物價の變化を隨伴す可しとの歸結に到達した（Della moneta, p. 40, et seq）。是れ明に流通速度を度外視せる貨幣數量說の幼稚なる形態である。然らば貨幣數量一定の際個々の貨物の價値を決定す可き因由如何。そは貨物の稀少と饒多に依る。但 Montanari は謂ふ「余は一物の饒多とは其絕對的存在量の多大なる時にあらずして、是に對する人々の欲求・估料・願望に比し其相對的存在量の多大なる謂ひなりと解釋す」と（p. 59）。此意味に於て稀少は凡ゆる貨物を貴重ならしめ饒多は之を低廉ならしめる。斯くして「貨幣の流通額一定せる場合に於ては人々の貨物に對する估料變動すれば物價は變動し、欲求の緩急に應じて貨物も騰落する」と云ふのである（p. 61, Sewall: op. cit. pp. 55-57）。如上の言說が欲望充足力換言すれば效用の側より價値の科學的解說を與へんとして、略ぼ核心を把握し得たるに近き觀有るは何人も異存無き所であらう。此二大巨匠を先驅として Galiani 出づるに及び伊太利に於る主觀的價値論は愈々洗鍊彫琢を加へた。

六

Ferdinando Galiani（1728-1787）は倫敦滯在中 "Dialogues sur le commerce des blés," 1770—原名 "Dialoghi sul commercio dei grani"—一篇を以て Physiocrates の學說に嚴洌なる指彈を加へ一躍全歐の學界に盛名を走せたれども、其價

値論の綱要は寧ろ一七五〇年匿名を以て、更に一七八〇年本名を署して公刊せる "Della Moneta" 中に窺はれる。

價値とは Galiani の定義に從へば、「人間の心意中に於る一物の所有と他物の所有との間に存する比例の觀念である。然るに人間の心意は變化し欲求は變化する。隨つて物の價値も變化する。換言すれば價値は比率である。而してそは效用と稀少性なる名に依つて表現せらるゝ二個の比率の複合物である。例へば人生必須の要素たる空氣と水が明に無價値なるは其稀少性を缺けるが故である。他方に於て日本の海岸より運ぶ一囊の砂は假令稀少なりとするも、特殊の效用無きに於ては毫釐の價値をも持たぬであらう」(Galiani: Della Moneta in Monroe's "Early Economic Thoughts," p. 283)。爰に於てか研究は效用と稀少性との解剖に傾向する。

即ち曰く「效用とは幸福を齎らし得る物の性能の謂ひである」(Ibid. p. 284)。「Davanzati も共に大抵の人々は云ふ、天然の犢は黃金の犢よりも高貴なるに其價値是れに及ばざるは如何と。余は答へて云はん、若し天然の犢にして黃金の犢の如くに稀少なりせば、其價格は其效用並に欲求が他に優越する程度に從ひ一層高價であらう。是等の人々は複合的比率を構成する多元の要素を無視し、價値を以て一元的要素に基くものと想像するものである。他の人々は又曰く、一磅の麵麭は一磅の黃金よりも一層有用なりと。余は答へて云はん、是れ『一層有用なり』とか『一層有用ならず』とかは、各個人の相異る境遇に從ひ測定す可き相對的言辭なるを知らざる嗤ふ可き迷誤である。固より麵麭と黃金と其孰れをも缺除せる者に關して云ふ時は、麵麭は

次に「稀少性とは物の分量と其使用との間に存する比例の謂ひである。使用とは啻に物の破壞のみならず亦た一人が之を用ひつゝある間は、他人の欲求の充足を妨ぐるが如き占有をも意味する。例へば百枚の繪畫を賣らんとするに一紳士が其五拾枚を購入したりとせば、繪畫は稀少性を倍加する。是れ其破壞せられし爲にあらずして五拾枚は最早賣買に供せられざるが故である」(Ibid. p. 289)。

彼れは是れより轉じて近世經濟學に慣用の區分を立つると共に、又當時の勞働價値說の影響を漏洩する。以爲らく、物の分量を論せんと欲すれば勞働に依つて任意に增加し得ざるもの、例へば果實動物の類と、勞働に依つて任意に增加し得るものとの區別を念頭に置くを要す。而して後種の貨物を其分量の關係に於て考察するには、唯だ之を生產するに要する勞働のみを顧

慮すれば足る。「勞働は啻に技藝の所產たる繪畫・塑像・彫刻等に止らず、他の幾多の貨物に關しても價値の唯一の源泉である。其勞働を或は增し或は減ずる程度に於てのみ、素材の分量は是等諸物の價値に入る。斯くして何人かゞ土砂を混合せる黃金は何故土砂よりも價高きかと問ふ者あらば、彼は土砂を囊中に盛るには半時間にて易々たれども、黃金を囊中に充滿せんと欲すれば此土砂の含有する甚だ少許の金粒を採集する爲、幾多の歲月を要する事を須く記憶しなければならぬ。而して勞働を測定するには三條の注意を要す。勞働人員、勞働時間、及び各種勞働者の賃銀の異同是れである」（Ibid. pp. 289-290）。畢竟縷述の如く價値の據つて立つ諸原理を考察し來りて、吾人は其確定恒常普遍にして且つ現世の事物の秩序の上に其基礎を有する事を發見したるが故に、吾人の之を決定するや決して獨斷偶然にあらず、總て秩序有り階調あり且つ必然的なるを知る。價値は變動す。されど氣まぐれにあらず。其變動其物が整然精確不易の規律に準據するものである。そは觀念的である。乍併吾人の觀念其物が欲求と快樂の上に、換言すれば人間の內的心意の上に根據を有するものなるに依り、公正と鞏固を兼備す」と云ふのである（Ibid. P. 294）。

吾人は Davanzati に啓示を享けたる證跡歷然たる Galiani が毫も先覺の聰明を賞揚するの意志無く、其獨創の卓見を頌へずして其未熟の構想を嗤笑し、自ら獨り高しと爲せる倨傲の態度には寧ろ顰蹙を禁ずる能はざるものあれども、然も彼れに於て漠然朦朧たりし觀念が此れに於て顯然明瞭なる學說に進み、效用と稀少性とを摘出對立せしめて唯其間の架橋連鎖を後人の思索に委ねたる Galiani の功績は、之を認むるに吝ならざるものである。Angelo Bertolini は曰く「Galiani の學理的體系は當時一般に受容せられたる Locke 並に Cantillon のそれと毫末も共通する所無し。そは Jevons 並に Menger の學說を豫想す」と（Palgrave's Dictionary of Political Economy, Vol. II. p. 178）。此主觀的傾向顯著なる價値概念は軈て透徹せる Turgot の思辨を通じて佛蘭西に移植せられ、正系 Physiocrates の客覺的價値論を鎭壓して爾後の歸嚮を決定す可き緣由とはなつたのである。（未完）

「近世資本主義論」第二版序文緖論に於けるゾムバルト。

高木壽一

ゾムバルトが本書の第一版より十五年の後に第二版を出したる時、此兩者が如何なる相異を示せるかを知らんがため には先づ著者自らの示す所に聞かざるべからず。之がために筆者は第二版の序文緖論の概要を摘記したり。筆者が本文を草したるは大正十一年春のことなれども今或必要に促がされて此稿を茲に示すの機會を得ることゝなれり、

一

ゾムバルトが序文の劈頭に於て云へるが如くば、此「近世資本主義論」第二版が舊版に對し全然別個の新著なるとは內容目次を一見する者の明に認むる所なるべく其舊著より採れる所僅に十分ノ一を出でず、而も之等の小部分すら尙全然新なる思索解釋によりて配置せらる。本書に於て同一表題を承揭するも、こは此書が任として研究する根本問題と其根本的思想の系統とが尙、同一なるを示さんとするものに外ならず。其他の點に於て本書は內容に於て全く新著なりと。

而して、本書第二版が舊版に對して示す相異に就きて特に左の諸點を列擧せり。